最終レポート

私の交換留学生としての経験・日本の知的障害特別支援学校における性教育

文芸学研究科　テニス・カタリナ
指導教員　吉澤 弥生　教授

はじめに

このレポートでは、私が共立女子大学で1年間交換留学生として過ごした経験と私の研究を紹介する。第一章は私が日本に来た時から経験したことや最も楽しんだことなどについて考察する。第二章はこのテーマを選んだ理由を詳しく説明し、日本における性教育について具体的に述べる。そして、知的障害特別支援学校における性教育について考察したい。特に、七尾事件という出来事に関して述べたいと思う。

第一章　日本の生活

初めて日本に来たのは2015年、すなわち11年前のことだ。今回来るきっかけは共立女子大学に留学するためであった。2015年当時と比較すれば、日本が大きく変わっていると考えられた。去年の9月2日に成田空港に到着して、蒸し暑い日本と出会った。それだけを比べても、2015年の春の旅行とは全く違う環境だった。地球温暖化が一因かもしれないが、日本の夏も秋もフランスの季節とは全く異なっていると思われる。その最初の体験のおかげで、研究者の視点から考えた社会学的な意見は、エアコンは命に関わる重要な生活品だということだ。日本人はおそらく想像できないかもしれないが、フランスの家庭ではエアコンがほとんどない。しかしながら、日本人は家に少なくとも一つエアコンがある。これが経済的に避けられない出費だとしたら、貧しい家庭にとってもう一つのお金の悩みになるのではないだろうか。つまり、私が日本に到着した瞬間にすでに研究は始まっていたということだ。

留学が正式に始まる前、親と一緒に旅行し、関東地方の大きな町を訪ねることができた。東京、京都、大阪、奈良であった。2015年の旅行の空気や雰囲気、あるいは私が個人的に感じたことは想い出になったが、京都の宇治の町を訪ねた時は同じ美しさと静かな空気をもう一度感じることができたのだ。最も良いいくつかの想い出を選ぶと、日本の伝統文化の体験かもしれないだろう。京都の和菓子屋で母と一緒に簡単な季節限定和菓子を初めて作ってみて、お抹茶と共に食べてしてよかった経験だと思う。それに、宇治市にいた時、お抹茶作り体験にも参加した。福寿園宇治茶工房という場所に行って、少し歴史的な話を聞いてから体験が始まった。自分が石臼で挽いていたので、お抹茶の味やクオリティーが異なるのであった。先生の指導に従って、茶

筅の使い方を学んでから自分で使って、身に付けるになるのは重要なポイントだと思う。そして、渡されてくれた和菓子と共に食べた。私にとって、実に良い経験だった。

それから、入学して、共立女子大学の授業に参加することになった。最初は難しかったが、二回目の授業にはもう慣れたということだ。日本の大学生活はフランスの大学生活と異なっていると考える。なぜなら、同じ一年生だけれども、フランスの大学生の方が授業が少ないからだろう。そのおかげで、私の研究テーマに関わる授業を選んで、そして授業が終わってから出かけられた。「インドア派」という自分のことを表す言葉を日本語の授業で学んだが、普段より多く出かけることになって、少しだけでもより「アウトドア派」のような行動をして、さらにカフェやレストランなどに行って結局楽しかったのだ。その理由は、好きな場所を見つけることになったからだと思う。ユニークなかき氷が食べられる店も、美味しい手作りケーキが食べられる店も、常に行くタピオカ店も、いつの間にかこのような習慣が付いた。

その上、グルメスポットを探す以外の活動もしていたのだ。11年前のように、今回も「推しを様々な形で応援する活動」という新しい趣味を楽しく今でもしている。短く述べると「推し活」と呼ばれている活動であって、日本だけでできる活動だと思う。好きな2次元と3次元の推しのグッズの販売は日本と韓国だけだ。ファンミーティングのような特別なイベントはその国以外はなくて、今年は私の唯一無二の機会である。帰ると、コンサート以外、もう推しと会えないだろう。しかも、日本限定アルバムやトレーディングカードなどは400以上集まってきたということだ。少し運が良いので、推しのグループは新曲を発表して活動を3回再開して、非常に推し活が楽しかったと思う。ただ、欲しいトレーディングカードが当たるのはまた別の問題である。

結構なお金がかかったが、結構な幸せももらったと考える。帰国してから、長らく思い出すことになるのではないだろうかと思う。推しと友人と一緒に様々な経験があったからこそ留学は著しく楽しい体験になったと考えるのだ。

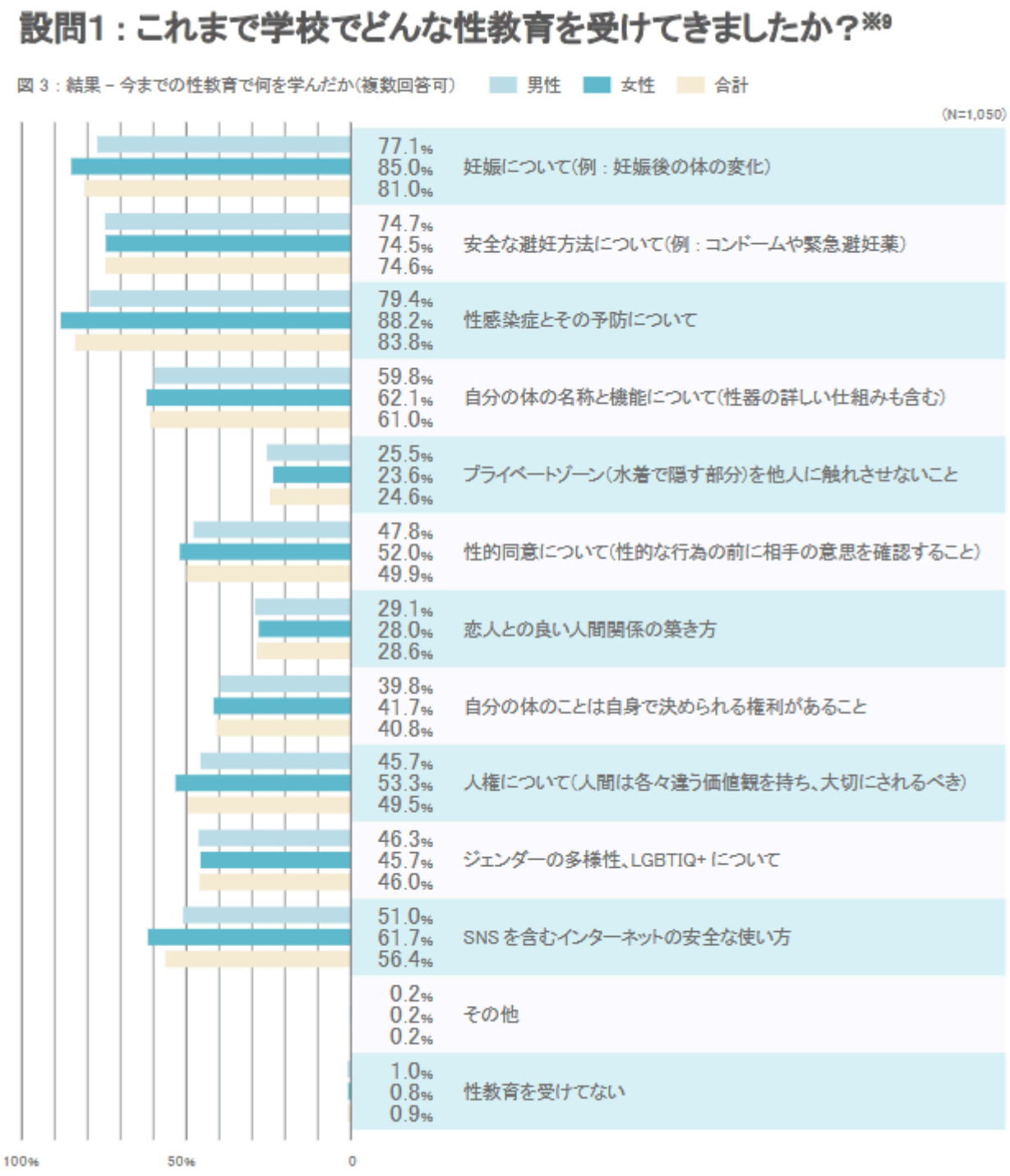
第二章　研究について

このテーマはさまざまな角度から検討することができる。なぜなら、教育というものは社会の全ての人に影響するからである。小さい頃から大人になるまで、約12年間ほとんど毎日学校にいる。その長い時間の間に子供達は成長して、自分の考えを発達させて立派な大人になることが求められている。そのため、学校における教育はとても重要なのだ。

私はこのテーマを選ぶ前に、さまざまな考えがあった。社会学と、科学、特に生物学のような専門分野に関心があるので、こうした分野のものの見方を参考にしながら、一歩一歩このテーマに近づいて、性教育の問題に興味を持つことになった。

このテーマには、アプローチの角度が多すぎるので、知的障害特別支援学校における性教育にフォーカスすることにした。他のハンディキャップを持つ子供達のための学校ももちろんあるが、知的障害の場合とは事情が少し違う。足や腕がよく動かない時でも、人は子供扱いされてしまうことがある。しかし、身体障害者は大人になると、普通に判断できる人になる。その理由で、身体障害者の子供扱いは不当で差別的だと考えられる。社会の中で、大勢の人がそれをよく分かっているが、知的障害者の場合はどうだろうか。それは別の話だ。

第二章は日本における性教育について述べる。ユネスコによると、性教育の重要なトピックは次の四つのポイントである。人体の仕組み、思春期と月経、妊娠と出産と避妊法、性病やエイズなどの性感染症とそのウイルスである。もちろん、日本でも大勢の生徒がその内容をよく知っていると述べている。下のグラフは15歳から19才までの1050人の学生にアンケート調査をした結果である。「これまで学校でどんな性教育を受けてきましたか」という質問に答えている。水色は男性、青色は女性、その合計を黄色で示している。この結果から、若者たちは重要なことについて教育を受けていることがわかる。



次のグラフを見ると回答者は、前のグラフと同じ1050人だが、彼らが全国の生徒であることがわかる。結果は地域によって異なることもそうでないこともある。例えば、妊娠については北海道の87.5パーセントの生徒達が授業を受けており他の地方でもほぼ同じぐらいの割合だが、自分の体の名称と機能についてには少し問題がある。東北では69.5パーセントの学生が自分達の体についての授業を受けたことがあるが、四国の学生は35.5パーセントしか受けたことがない。このように、質問によって日本では地域によって大きな違いがある。「時間がない」などの理由はいくつもあるのだろうが、結局若い人の中で知識の差が生まれている。

表 3：設問 1 の地域別結果

(N=1,050)

項目	上位 1 位	上位 2 位	下位 2 位	下位 1 位
妊娠について(例：妊娠後の体の変化)	北海道 87.5%	東北 86.4%	中部 77.5%	四国 74.2%
安全な避妊方法について(例：コンドームや緊急避妊薬)	東北 84.7%	北海道 78.6%	近畿 71.5%	四国 71.0%
性感染症とその予防について	東北 89.8%	中部 84.8%	近畿 83.1%	四国 71.0%
自分の体の名称と機能について(性器の詳しい仕組みも含む)	東北 69.5%	中国 67.8%	近畿 58.1%	四国 35.5%
プライベートゾーン(水着で隠す部分)を他人に触れさせないこと	東北 40.7%	北海道 26.8%	近畿 22.1%	四国 16.1%
性的同意について(性的な行為の前に相手の意思を確認すること)	東北 66.1%	九州・沖縄 56.5%	近畿 49.4%	四国 38.7%
恋人との良い人間関係の築き方	北海道 35.7%	東北・中国 35.6%	近畿 26.7%	関東 24.1%
自分の体のことは自身で決められる権利があること	中国 50.8%	北海道 46.4%	四国 38.7%	関東 37.2%
人権について(人間は各々違う価値観を持ち、大切にされるべき)	東北 57.6%	九州・沖縄 53.3%	四国 45.2%	北海道 42.9%
ジェンダーの多様性、LGBTIQ+ について	近畿 53.5%	中国 52.5%	東北 40.7%	四国 38.7%
SNS を含むインターネットの安全な使い方	東北 66.1%	九州・沖縄 64.1%	北海道 44.6%	四国 38.7%

しかし、それだけではない。より大きな問題があると言われている。ユネスコの重要な四つのポイントは学校で学べるが、足りない部分もある。2019年、日本の教育学者で女子栄養大学名誉教授の橋本紀子は専門家としてインタビューを受けた。その時、中学校の1年の保健体育の授業で妊娠の経過を取り扱わないことがあるし、小学校の5年の理科の時に受精に至る過程は取り扱わないと述べた。そして、インタビューでこのイラストについても述べている。これは小学校3、4年生用の保健体育の教科書で、こどもと大人がTシャツと半ズボンを身につけているので、体の変化を学ぶことは結局出来ない。



先でも少し紹介したが、ここからではより詳しく知的障害特別支援学校における性教育について述べたい。性教育は生徒の発達段階に即して系統的・段階的に進めることが重要だと言われているが、知的障害特別支援学校ではこの点が少し難しいと考えられる。体は他の子供のように変化していても、精神的、知的には異なる。

具体的な例として、東京にある七生特別支援学校（現）の事件について述べたい。この学校は身体障害者も知的障害者も受け入れている学校である。2003年にこの学校の性教育実践に対してバッシングが起きた。その理由は、この学校の性教育が学習指導要領を逸脱し不適切で過激な性教育であるなどと批判されたことである。この学校では、1997年に二人の生徒が性関係を持ったことがあった。これをきっかけに、歌や人形を使った性教育が開発された。先生たちは親と相談し、性教育のプログラムの全てを紹介したが、政治家とメディアが批判して、バックラッシュを作ってしまった。

このように、知的障害特別支援学校における性教育は難しく、今でも批判されている。保守的な反応がある限り、一般的な性教育も知的障害の子供向けの性教育も大きな難関を超えなければならない。

まとめ

実は、2025年9月2日から2026年8月14日までの交換留学の経験は去年2月まで全く想像できなかったものであった。なぜなら、その時あまり自分の能力、特に日本語能力には自信がなかったのだ。上手く勉強や手続きや生活などができないだろうと考えていた。だが、母の勧告のおかげで留学を申し込んで、先生の方々の指導のおかげで日本語能力が上達して、夢でも思わなかった素晴らしい留学ができたと思う。

———

参考文献

https://csetoolkit.unesco.org/toolkit/getting-started/what-comprehensive-sexuality-education

www.plan-international.jp/youth/pdf/0630_Youth_Report_01.pdf

https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c06603/

https://www.kokokara.org/

原恵美子,《知的障害児に対する特別支援学校における性教育実施の状況と，教諭と保護者の意識 》，治療教育学研究,no.30，2010，p. 61-69.

KOJIMA Yoshio,《 Trends in Research on Sexuality Education for Children and Youth With Intellectual Disabilities 》, The Japanese Journal of Special Education, vol. 50, https://doi.org/10.6033/tokkyou.50.313.